

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580128

研究課題名(和文) ソフトシステム方法論を援用した意味重視の英語指導法の開発・検証

研究課題名(英文) Developing a meaning-based English teaching approach with Soft Systems Methodology

研究代表者

田地野 彰(Tajino, Akira)

京都大学・国際高等教育院・教授

研究者番号：80289264

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ソフトシステム方法論を援用しながら、意思伝達の観点から、意味を重視した英語指導法の開発を行い、その教育効果を検証した。具体的には、(1)英語(とりわけ英文法)の指導のあり方を再定義した上で、(2)意味重視の英語指導法を開発し、(3)その指導法の教育効果について、PCを用いた文法性判断テストによって定量的に検証した。実験結果からは、意味重視の指導に基づく明示的知識が、英文処理における正確性と反応速度を促進し、実践的コミュニケーションにおいて必要とされる流暢さの育成に一定の貢献をするということが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a meaning-based English teaching approach with Soft Systems Methodology and investigate its pedagogical effects. More specifically: (1) the nature of English (particularly grammar) teaching was redefined from a communicative perspective, (2) a meaning-based approach to the teaching of English was developed, and (3) the effects of the approach were investigated with timed grammaticality judgement tests. The results of the study showed that the explicit knowledge obtained through this approach facilitated both accuracy and response time in processing English sentences, suggesting that it could make a contribution to the improvement of communicative language ability.

研究分野：教育言語学

キーワード：英語 教授法 教育文法 文構造

## 1. 研究開始当初の背景

学習指導要領の改訂(平成23年~25年度実施)により、英語(外国語)教育内容に大きな質的变化が見受けられる。小学校には「聞くこと、話すことを中心に指導」する外国語活動が導入され、高校においては「授業は英語で指導する」ことが基本とされている。

一方で、中学校では語数の増加と教材の題材の充実という量的な変化のみに留まっており、小学校と高校という両者の教育内容の質的变化に対応しうる英語指導法を開発することが急務となっている。具体的には、小学校で「聞くこと、話すこと」という音声中心の指導を受けた生徒が中学校に入学し、高校進学以降は「英語による説明の理解」に対応しなければならないという状況下では、どのような指導が中等教育(中学校・高校)に求められるのかを明らかにし、実際の教育現場において英語担当教員が指導可能な指導法を確立しなければならない。

特に、英語(外国語)教育の目標であるコミュニケーション能力育成のためには、固定語順という英語の言語的特徴を押さえた指導法の開発が重要であり、語順(文構造)に関する暗示的知識の習得について検証することは、英語(外国語)教授法研究に有益な示唆を提供しうるものである。

## 2. 研究の目的

本研究では、小学校から高校に至る縦断的な視点から、中等教育における日本人英語学習者のコミュニケーション能力育成を目的とした、意味重視の英語指導法の開発・検証を行う。具体的な研究目的は以下のとおりである。

### (1) 英語指導法の再定義

音声重視の小学校(外国語活動)から「授業を英語で実施」する高校に至る縦断的な視点から、ソフトシステム方法論を用いて、コミュニケーション能力の育成を目的とした、中等教育におけるより良い英語指導法に関する変換プロセスモデルを構築する。

### (2) 意味重視の英語指導法の開発

上記のモデルに基づき、認知言語学など理論言語学の知見により、瞬時に英語で理解・表現できるようなコミュニケーション能力の向上を目的とした指導法を開発する。

### (3) 開発した指導法の効果検証

開発された指導法が、瞬時に状況に対応するのに必要な英語の構造に関する暗示的知識の習得へとつながるかを定量的に検証する。

## 3. 研究の方法

### (1) 英語指導法の再定義

中等教育における英語(とりわけ文法)指導法の現状と課題の把握のため、小学校・中

学校・高校での英語指導法に関する文献研究や聞き取り調査、視察調査を実施した。この実態調査に基づき、日本の中等教育が抱える問題点を把握・整理し、ソフトシステム方法論を用いてより良い英語指導のあり方について大局的な見地から検討を行った。

### (2) 意味重視の英語指導法の開発

上記ソフトシステムの観点から、従来の英語指導が抱える問題点をどのように解決できるかについて検討を重ね、新たな意味重視の英語指導法を提案した。その際に、理論言語学・応用言語学・実験心理学の理論的基盤を持つことを考慮に入れて開発した。

### (3) 開発した指導法の効果検証

本研究において開発した意味重視の英語指導法により、実践的なコミュニケーション能力が求められる場で、英文処理を正しくかつ迅速に行う能力が身についたかについて、応用言語学・実験心理学で使用される手法を用いて実証研究を行った。具体的には以下の方法により検証した。

#### 調査協力者

意味重視の英語指導法開発後、佐賀県内の公立中学校の教諭を対象に説明会を実施し、説明会に参加した教諭を中心に、一定期間、実際の英語授業の中で当該指導が行われた。当該指導法のもとで英語学習を行った生徒たちの群に加え、統制群として、当該指導を行っていない生徒たちの群をも対象として実験を行った。なお、いずれの群の生徒たちも公立中学3年生であり、調査は平成27年8月から10月の間に行われた。

#### 実験素材

意味重視の英語指導法の効果について、時間制限付き文法性判断テスト(Timed Grammaticality Judgment Tests)を用いて検証した。調査協力者(公立中学3年生)には、指定のパソコン上で文字提示される英文が文法的か非文法的かをキーボード操作によりできるだけ早く判断し回答するように指示をした。その結果、各調査協力者の回答の正誤パターンと反応時間が記録された。

実験で使用した英文は、中学1年生および中学2年生の教科書で使用される語をもとに作成された。これは、調査協力者である中学3年生にとって実験文の英単語は既習であるので、語彙知識の有無が実験結果に影響を与えないようにするためであった。誤文は、日本人がよく犯す誤り(主語脱落および目的語・動詞の語順)をもとに作成し確認された。なお、正文・誤文の作成においては、語数および音節数の両方の観点から統制が行われた。

## 4. 研究成果

### (1) 英語指導法の再定義

上述の中等教育の英語指導に関する実態調査から明らかになった日本の英語教育が抱える問題点として、初等・中等教育間で目標が継続しているにも関わらず、実際の指導の上でその縦断的視点が欠けていることが挙げられる。本研究では、ソフトシステム方法論を導入し、中等教育での英語教育を入力と出力、制約と目標実現のためのプロセスを備えた「システム」として捉えた。具体的には、英語コミュニケーション能力の低い学習者（入力）を、クラスサイズや授業時間数といった制約を考慮に入れたうえで、コミュニケーション能力の高い学習者（出力）に育てるための効果的・効率的な指導法の開発を行えるようにした。こうしたソフトシステム方法論の導入により、初等・中等教育における英語教育において、細部の問題のみに陥ることなく、全体の整合性を重視した指導法の開発が可能となった。

## （２）意味重視の英語指導法の開発

上記のソフトシステム方法論に基づいて開発された新たな英語指導法では、従来の文法指導が抱える以下の問題点を解決する必要があった。多くの文法事項が「等価値」かつ「並列化」されているため、教師にとっては単調な指導に陥りやすく、また学習者にとってはコミュニケーションにおいて重要な文法事項間の関連性がわかりづらい。文法用語（例：主語、目的語、補語）が介在することで学習者に心理的負荷を与えることがある。また、文法用語を介することで、学習者が英文の産出や理解に時間がかかったり、認知的な負荷がかかったりすることがある。

こうした問題点を解決すべく、新しく開発した指導法は以下の２点の特徴を有する。意思伝達の観点から、固定語順という英語の言語的特徴に着目し、語順（文構造）の重要性を強調することにより、指導の優先度に傾斜を導入することを提案した。具体的には、文法を横軸（語順・文構造）と縦軸（冠詞、助動詞など）の二次元で捉えた。縦軸の誤りはコミュニケーションの上では大きな支障とはならないローカルエラーで済むが、横軸（語順・文構造）の誤りは文の意味を大きく変えてしまうグローバルエラーを引き起こす。したがって、語順（文構造）を重視し、これについて誤りが起こらないような指導法を開発した。理論言語学の知見から意味役割（動作主や被動作主など）を重視し、情報伝達の基本要素である 5W1H を組み合わせた意味グループ（Who-group, What-group, Where-group など）を取り入れた、新しい意味重視の英語指導法を開発した。当該指導法は、主語や目的語といった文法用語を使用せずに文中の意味役割に焦点を当てるため、学習者にとって直感的に理解しやすいものと期待される。英文を組み立てる際に文法用語が介在しないことで、日本の英語学習者が苦

手とする「話す・書く」といった産出技能の向上が期待できる。さらに、学習者は、たとえば動詞の次に来る「意味のまとまり」を予測しながら英文を読んだり聞いたりすることが可能となり、産出技能の育成のみならず、リーディングやリスニングといった受容技能の育成にも貢献できると考えられる。

以上のように、この指導法は、これまでの理論言語学の知見を基にして、意味グループの順序に焦点を当てたものである。また、当該指導法は、「誤り」の質を重視し、文法事項の重みづけを行ったものであるため、指導内容の再整理、および教員の指導力の強化や次世代の指導内容の改善につながると期待される。

## （３）開発した指導法の効果検証

文法性判断テストの結果、正答率と反応速度ともに、実験群（意味重視の指導あり）の方が統制群（意味重視の指導なし）よりも統計的に有意に成績が良かったことが明らかとなった。これは、意味重視の指導に基づく明示的知識は、英文処理における正確性のみならず反応速度をも促進し、実践的コミュニケーションにおいて必要とされる流暢さの育成に一定の貢献をするということを示唆している。

さらに、正文と誤文を分けて分析した結果、実験群の生徒たちは、とくに誤文に対する正答率と反応速度が良い傾向にあった。これは、当該指導法により、主語脱落や文構造（動詞と目的語の語順）の間違いといった日本人が犯しやすい誤りを防ぐ効果があると考えられる。

このように、本研究によって開発された意味重視の英語指導法は、日本の中等教育が抱える問題点を解決し、コミュニケーション能力を育成するという英語教育の目標を達成するのに資するということが示唆された。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

田地野彰.(2014).「語順 「意味順」を軸として」,『英語教育』63 巻 9 号, pp.13-15.

〔学会発表〕（計７件）

田地野彰.(2013).「コミュニケーションを支える文法能力の育成にむけて」,『長崎純心大学主催第 36 回純心英語教育公開講座（招待講演）』.11 月 16 日, 出島交流会館（長崎県長崎市）.

田地野彰.(2013).「英語を教えるのは難しい？ 新しい文法のみかた」,『京都女子大学文学部英文学科公開講座（招待講演）』.11 月 29 日, 京都女子大学（京都府京都市）.

田地野彰.(2014).「これからの英語教育

を考える 小学校英語教育から大学英語教育まで」,『日英言語文化学会(AJELC)第10回年次大会(招待講演)』. 6月14日, 明治大学(東京都).

田地野彰.(2014).「産出技能の育成にむけた文法指導「意味順」を軸として」,『第7回山口県英語教育フォーラム(招待講演)』. 11月23日, 山口県労福協会館(山口県山口市).

田地野彰.(2015).「大学・社会に繋がる英語教育 EGP から ESP へ」,『大学教員による教科別アクティブラーニング研修会(英語科編)(招待講演)』. 10月24日, 桐蔭学園(神奈川県横浜市).

田地野彰・金丸敏幸・笹尾洋介.(2015).「文法性判断の正確性と流暢さへの「意味順」知識の効果」,『第159回東アジア英語教育研究会』. 12月12日, 西南学院大学(福岡県福岡市).

田地野彰.(2016).「英語教育におけるアクティブラーニング 指導法と授業形態を中心として」,『大学英語教育学会授業学(関西)研究会(招待講演)』. 1月23日, 関西外国語大学(大阪府枚方市).

研究者番号: 70435791

(3) 研究分担者

笹尾洋介(SASAO, Yosuke)

豊橋技術科学大学・工学部・准教授

研究者番号: 80646860

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田地野 彰(TAJINO, Akira)

京都大学・国際高等教育院・教授

研究者番号: 80289264

(2) 研究分担者

金丸敏幸(KANAMARU, Toshiyuki)

京都大学・国際高等教育院・准教授